

# マイスターだより

川西町立小松小学校  
令和8年2月17日（火）No.20  
文責：情野 夏美

## 筑波大学附属小学校 学習公開・初等教育研修会に参加してきました！

2月14日、15日に校長先生、梓先生とともに、筑波大学附属小学校学習公開・初等教育研修会に参加してきました。学び多き二日間でしたので、文だけですが、私が参観した授業や研修会について先生方に共有させていただきます。また、指導案や板書の写真、購入した本を回覧しますので、ご覧ください。

### 研修会テーマ

学びの本質に立ち返り、生きた授業づくりを模索する研修会

### 1日目

○5年算数 比べ方を考えよう（割合）－日常生活の割合の探求・活用－  
田中英海先生

70%オフのA店と50%オフからさらに20%、30%、40%オフしたB店とではどちらがお得かを考える問題。教師対子どものやり取りで授業が進む。自力解決の時間は5分程度。児童が前に出て、説明する場面もあった。

- ・先生が想定していた  $50\% + 20\% = 70\%$  になるという考えは児童からは出なかったため、教師が取り上げ、違うことを児童に説明させていた。
- ・たくさん出てきた考えを丁寧に板書し、なぜそう考えたのか全員を巻き込んで考えている。
- ・児童の学力差をうめるために、図を書かせる手立てをとっているという。
- ・定価は100円として計算していたが、子どもたちと決定した。
- ・図は、教科書にある二重の数直線を使わず、一般的な数直線を使った。教科書をみて教えるではなく、子どもから出てきた図を解釈して使っていくようにしているようだ。

○5年算数 比べ方を考えよう（異種）－「そろえる」見方・考え方で活用－  
青山尚司先生

宿泊の部屋割を平等にするにはどうしたらいいかを考える問題。女子15人3部屋、男子16人4部屋を平等にする方法を考える場面で授業は終了した。教師対子どものやり取りで授業が進む。自力解決の時間は5分程度。

- ・女子15人の方では、3部屋のたたみの数の合計を人数で割って、一人あたりのたたみの数2と出した。その後先生は、3つのそれぞれのたたみの数 $\div 2$ をして、人数を求める式を取り上げていた。分科会では、それぞれのたたみの数 $\div$ 人数ではないかという話が挙がった。
- ・男子16人の方では、たたみの数 $\div$ 人数＝一人あたりのたたみの数の式を取り上げていた。女子と同じく平等にするにはどうしたらいいかという問いを投げかけ、たたみの数を減らしていいことも条件に加える。分科会では、条件は最初からそろえるべきであるという話が挙がった。（女子はたたみの数を変えていないので、男子だけ変えるのは、整合性がないということだった。）
- ・「～さんの考えの続きを話してみて。」や「～さんの考えを隣の人と確認してみて。」など思考したことを対話する場面があった。
- ・授業の最後には、「今日のMVP」を決定していた。何人かの児童の名前が挙がり、具体的な理由も述べていた。

○研修会 適用や活用を問い直す～子どもを探究的な学びへ導くために～

発表者 池田敏和（横浜国立大学） 清野辰彦（東京学芸大学）

盛山隆雄（筑波大学附属小学校）

- 活用には2つある。数学的事象と現実的事象。日常の事象と算数を組み合わせることが大事。
- 適用と活用は、本来相対的なもの。探す→選ぶ→ためす→ひろげるがサイクルになっている。探究を更新し続けることが大切。
- 問いの設定が重要になってくる。「これをやったらどうなるんだろう。」とヒントを自分で獲得していく。正解が分からないからこそ、次への一歩が大事。
- 適用や活用は、本時の問題と切り離さない方がよい。

適用や活用を行うと…

- ① 見つけたこと・見えてきたことを試してみたいくなる。
  - ② 表現する・使うことによって理解しているかどうか、身につけているかどうか自分で理解する。
  - ③ 算数が何に役立つのか、見方・考え方のよさを知ることができる。
  - ④ 学び方を学び、自ら探究できるようになる。
- 子どもの発想→対話→合意形成
  - 子どもに何を言わせたいか、獲得させたいかを教師が持っていること。

2日目

○5年国語 作品のテーマを読み解く「大造じいさんとがん」 弥延浩史先生

「どうして、大造じいさんは、残雪を撃たずに、銃をおろしたのか」という子どもたちから出された問いを解決する授業であったが、「どこで大造じいさんの気持ちが変わったのか」という問いを中心に授業が進んでいった。教師対子どものやり取りで授業が進む。途中で、児童は席を立って、友達の考えを自由に聞く場面もあった。

- 児童から出た問いをもとに、授業を展開していくことの大切さがわかった。自分たちで立てた問いだからこそ、多くの児童が深くのめりこんでいたように感じた。
- 読んだ感想ではなく、「読後感」という言葉が飛び交っていた。1時間目に感じた読後感を板書したものを児童に見せ、今と変わったか問うことを行っていた。

○1年国語 リフレクション型国語科授業—物語「お手紙」— 白坂洋一先生

「お手紙」を学習して、劇やペープサート、ポスター作りをやってみたいと子どもたちから意見が出て、「お手紙ランド」を前時までに実施した。本時は、その活動をふり返って、さらによくするにはどうしたらよいかや、次の学習ではどのようなことを行いたいのか、教師対子どものやり取りで授業が進んだ。

- ある班の動画を見せたり、実際に劇を行ってみたりして、どうするともっと良くなるかを児童から引き出していた。児童からは、難しかったところやいいところの意見が出たので、教師から「ああ。とてもいい手紙だ。」のところはどう読むとよいのかを問うことを行っていた。
- 具体的に話すことができる児童が多く、一人ひとりがかなり長く話すことがあったが、教師は最後までよく話を聞き、肯定していた。話がずれている場合は、問い返し、軌道修正していた。
- 活動を行って終わりではなく、じっくりと振り返ることの大切さを感じた。

○研修会 学習者の「問い」を授業に生かす—国語科における探究的な学びの創造—  
登壇者 奈須正裕（上智大学） 山元隆春（広島大学）  
小泉茂男（広島市立袋町小学校） 白坂洋一（筑波大学附属小学校）

- 省察（学習をふり返るだけでなく、次の学びを決める行為）を大事にしている。  
ふり返り＝感想ではない。どうしても教師の出が多くなってしまう。
- 他者との出会いによって、問いは自分事となる。
- しっかり教えて、しっかり委ねる。
- 質問することは対象を多角的に吟味・検討すること。質問するときには頭の中で問いの編集が起こる。質問することで言葉を学ぶ喜びを味わえる。
- 少数の子どもが、教師にとって都合の悪い問いを発する時、どこまで子どもと付き合うかを見極める。教材文と照らし合わせる。
- 教材研究はもちろんのこと、学習材研究も重視していく。
- 問いを作るだけではない。「観」の変革が重要。

#### 【全体を通して】

- 板書に子どもの発言を残していて、書き残すことを大切にしている。
- ICT 機器は、あまり活用していない様子だった。
- 先生がかなり話していて、教師主導ではあるが、児童の考えを引き出していた。
- めあてはなく、先生の導入の話題提供から授業が進んでいる。
- まとめがなく、先生が授業の内容をまとめて、次の授業で行うことを話して終わっている。
- 算数は、教科書を使っていない。
- 適宜、隣の人と相談してみる、確認してみる、考えを伝えてみるがあった。
- 机間指導が多い。